

## 2. ビデオ教材「学校教育とカウンセリング」の研究開発 — “演出ノート” を中心に —

福井 康雄

### 1. はじめに

暴力行為、いじめ、不登校など、教育をめぐるさまざまな問題が多発する中で、子供たちの“心の教育”の必要性を指摘する声が高まっている。“心の教育”については、第16期中央教育審議会（平成10年6月）で、「幼児期からの心の教育の在り方について」の答申があったり、平成10年10月からは、文部省による、中学校を対象とした「心の教室相談員」の配置が始まったりと、さまざまなアプローチが試みられている。しかし、それらはいずれも、まだ緒についたところであり、十分な活動を展開するためには、教育手法・カリキュラム等とともに、それらに対応した、数多くの適切な教材の開発が必要とされる場所である。

当プロジェクトは、「メディア教材のプロトタイプに関する研究開発」（福井康雄、山田恒夫、芝崎順司、宮本友弘）を課題に、平成9年度から4年計画で発足したもののだが、計画立案の当初から、子供たちの“心の荒廃”が問題化しつつある教育界の現状に着目し、“心の教育”に資する教師教育教材の開発を、研究テーマの大きな柱の一つとして、検討を続けた。そして、その結果、学校の教育相談や生活指導などで、教師が児童や生徒と心の交流を図る際に効果的とされ、また、教員養成カリキュラムでも重視されるようになってきたカウンセリングの考え方や技法に注目し、「学校教育とカウンセリング」を具体的なテーマとした、メディア教材のプロトタイプの開発を目指すこととしたものである。

本稿は、ビデオ教材「学校教育とカウンセリング」の開発過程を、特に、その演出面に焦点を絞って、辿ったものである。カウンセリングをテーマとする限り、どんな形にせよ、面接場面を描くことは避けられないところである。しかし、カウンセリングでの面接は、そもそも、秘密を守ることを約束して、カウンセラー（相談者）とクライアント（来談者）が密室で行うもので、その内容は非公開を原則とする。非公開で、なかなか観察する機会のない素材を、映像化してオープンにするところにこの教材の意義があるのだが、そのような素材を、どのような手法で映像化したらよいのか？ あるいは、ドラマにして台本を作り、俳優に演じさせるという形で映像化することは可能だが、この場合、その映像を、大学の教職課程での利用に堪えるような、リアリティに溢れたものとするには、どのようにしたらよいのか？ このように、この教材では、特に、各場面を、いかに表現していくかという、演出上の工夫によって解決しなければならないが課題が少なくない。

この度の教材の開発過程に、主として、構成・演出者として携わった立場から、カウンセリング教材の開発過程での、演出上の諸問題を整理することとした次第である。

（尚、このカウンセリング教材の開発は、主に、共同研究者の中の福井と宮本とが担当し、企画面や制作面で、それぞれの専門性を生かしながら作業を進めたものである。）

## 2. 企画立案の経緯

企画立案に当たっては、まず、所外の大学教員、中・高現職教員、専門機関職員などのカウンセリングの専門家に、研究協力者としての参加を要請し、研究グループを組織した。最終的に決定したメンバーは、以下の19名である。

研究者	現職教員・職員
石隈 利紀（筑波大学心理学系助教授）	大野 精一（都立足立西高等学校教諭）
市川 伸一（東京大学教育学研究科助教授）	大関 健道（町田市立福田中学校教諭）
鶴養 美昭（日本大学人間社会学部助教授）	片野 智治（私立武南高等学校教諭）
岡田 康伸（京都大学大学院教育研究科教授）	佐藤 勝男（大宮商業高等学校校長）
小野瀬雅人（鳴門教育大学学校教育学部助教授）	野中真紀子（埼玉県立南教育センター指導 相談部 指導主事兼所員）
倉光 修（大阪大学人間科学部教授）	
國分 康孝（聖徳栄養短期大学教授）	松本 晶治（埼玉県立浦和商業高等学校教頭）
塩見 邦雄（兵庫教育大学学校教育学部教授）	横島 義昭（茨城県立下妻第二高等学校教諭）
田畑 治（名古屋大学教育学部教授）	
松浦 宏（大阪教育大学教育学部教授）	
松村 茂治（東京学芸大学教育学部教授）	
渡辺三枝子（筑波大学心理学系教授）	

-50音順-（肩書は1998年8月時点）

上記の研究協力者に、センター側のスタッフを加えたプロジェクトチームでは、研究開発の開始に当たり、企画の基本計画を立てるため、以下のように二回に亘って研究会を開催した。

第一回研究会	平成9年9月9日（火）	於	放送大学学園東京連絡所 （研究者グループ中心）
第二回研究会	平成9年9月14日（日）	於	メディア教育開発センター研究棟 （現職教員・職員グループ中心）

カウンセリングの教育への導入については、さまざまな立場からの研究・実践があり、その取組みについての考え方は、実に、多岐に亘っている。プロジェクトチームのメンバー構成に当たっては、全国の高等教育機関での幅広い利用を目指すセンターの立場から、出来るだけ多方面の第一線の関係者に参加を求めたこともあり、研究会では、それぞれの考え方がぶつかり合い、真剣な意見の交換が行われた。

殊に、スクールカウンセラーの学校への導入については、学校でのカウンセリングは、学校現場をよく知る教師が行うべきだという立場と、臨床心理士などの専門家が行うべきだという立場などがあり、さまざまな考え方をもちメンバーの間で、鋭い議論の応酬が行われた。しかし、最終的には、今回は、初めての試みでもあり、まず、カウンセリングの実態に触れ、その基本的なあり方を理解させるという“ねらい”から、教師・スクールカウンセラー・専門機関

職員という、それぞれに立場の異なる3人のカウンセラーの実践事例を取り上げて、映像化しようということになった。こうして、基本的な考え方についての意見交換を行った後、教材の具体的な内容についての検討を行い、凡そ、以下のようなことが確認された。

- ① 主題は「カウンセリングとは何か? それを教育にどう生かすか?…」といった、基本的な原理が分かるものにする。  
(タイトル例: 「教師が生かせるカウンセリング事例」、「教師のためのカウンセリング技法—学校における相談と援助—」)
- ② 構成は「担任教師、スクールカウンセラー、専門機関相談員による、それぞれに立場の異なる三つの実践事例を描くが、面接相談だけに焦点化するのではなく、面談に至る問題発生の段階や、その後の対応についてもきちんと描き、教育相談を中心とした、学校等での問題への取り組みの全体像を描く。
- ③ 手法は「ドキュメンタリー形式とするが、面接の場面については、プライバシーの問題等があり、実際の事例の撮影は不可能なので、各面談の状況設定に合わせたロールプレイングを行い、それを映像化することとする。

こうして、この教材では、これからカウンセリングを学ぶ教員養成課程の学生たちに、まず、カウンセリングとは何かを把握してもらうために、通常では、観察・経験しにくいその実態を、出来るだけ現実に即して、具体的に描いて提供する…という基本方針を確認したところで、次のシナリオ作成の段階へと進むこととなった。

## 2. シナリオの作成

シナリオを作成するに当たっては、まず、どこを舞台として撮影をするか、具体的な取材場所を特定する必要がある。センター側では、共同研究者等から情報を得て、いくつかの学校や教育機関をシナリオハンティングし、その結果、以下の3個所の取材場所を決定した。

- ① 埼玉県伊奈町立伊奈中学校 (「担任教師による実践事例」編)
- ② 東京都東大和市立第一中学校 (「スクールカウンセラーによる実践事例」編)
- ③ 埼玉県立南教育センター (「専門機関相談員による実践事例」編)

その後、上記の取材場所での調査を深めた上、三編のシナリオ (撮影稿) を完成させた。各シナリオの構成の骨子は、以下の通りである。

### 「学校教育とカウンセリング① —担任教師による実践事例—」

- (1) プロローグ —カウンセリングの意義—
- (2) 学校の考え方 —カウンセリングの前提条件—
- (3) 問題の発見 —カウンセリングの導入—
- (4) カウンセリング —面接相談—
- (5) 問題への対応 —教師たちの連携—
- (6) エピローグ —まとめ—

### 「学校教育とカウンセリング② —スクールカウンセラーによる実践事例—」

- (1) プロローグ

- (2) スクールカウンセラーとは？－導入の経緯－
- (3) スクールカウンセラーの仕事－開設後の経過－
- (4) カウンセリングの実態－面接相談－
- (5) 問題の解決に向けて－教師たちとの連携－
- (6) エピローグ－今後の課題－

「学校教育とカウンセリング③－専門機関相談員による実践事例－」

- (1) プロローグ－相談の依頼－
- (2) 南教育センターの教育相談
- (3) カウンセリング①－母親との面接相談－
- (4) カウンセリング②－生徒との面接相談－
- (5) 面接の経過
- (6) エピローグ

取材対象は異なるものの、いずれの構成内容も、基本的にはA「面接の背景」→B「面接」→C「面接後の対応」という展開になっている。A、Cは現実の活動を、そのままに映像化する個所だが、構成の主体となり、時間配分の上でも大半を占めるBの「面接」場面は、ロールプレイングによって再現することになっており、当然、その描き方にも工夫が必要とされる部分である。

先にも記したように、本シリーズは、これからカウンセリングについて学ぶ教職課程の学生を主な対象として、学校や教育機関でのカウンセリングの実態を、出来るだけを現実に近い形で提供して、その理解を深めることを第一の目的としている。したがって、視聴者に、その画面が少しでもわざとらしく、嘘っぽく感じられたとしたら、なによりも大切な教材としての説得力を失い、その役割は半減してしまうことになるであろう。取り上げる題材の性格上、一部に俳優を起用したり、いわゆる“やらせ”による再現を行うことは、避けられないところだが、この際にも、いかにして、リアリティのある画面作りをして、他の実写画面等との融合を図っていくかが、演出上の大きなポイントの一つとなってくる。シナリオ完成後の準備の段階では、取材先の学校や教育機関と綿密な打合わせを重ねつつ、“どうしたら、より現実感のある画面作りが出来るか？”といったところに焦点を絞りながら、演出プランを固めていった所以である。

### 3. 演出手法をめぐって

(演出手法の種類)

先のシナリオを、演出上の視点から整理すると、凡そ以下の4点に絞られる。

- ① 「“現実”を、そのまま手を加えずに、映像化するもの…」
- ② 「“現実”を、実際の人物による“やらせ”によって再現して、映像化するもの…」
- ③ 「“現実”を、実際の人物に俳優を加えた“やらせ”によって再現して、映像化するもの…」
- ④ 「ロールプレイングによるもの…」

①を、「担任教師－」編で見ると、『登校風景』、『職員室の動き』、『校内各所での生徒たちの

動き』などの場面があり、また、「スクールカウンセラー」編では、『登校風景』、『グラウンドでの運動風景』などの場面が上げられる。これらは、ニュースのように、ありのままの姿を記録することが目的なので、被写体の自然な動きをとらえるために、カメラの存在を、出来るだけ被写体に気づかせないように工夫することが一つのポイントとなってくる。

②には、「担任教師」編での『学年会』、『教育相談担当者会』、『教育相談研修会』などの場面があり、また、「スクールカウンセラー」編での『職員室の動き』、『カウンセリング室の動き』、『昼食風景』、『学年会』、『教育相談担当者会』などの場面、「専門機関相談員」編での『教育相談部の動き』、『受理会議』、『電話相談室』などの場面がある。これらの場合には、全く素人の登場人物に、カメラの前で演技を“やらせる”わけで、彼等に、いかにカメラを意識せず、リラックスした動きをしてもらうかがポイントとなる。出演者は素人とはいえ、その演技は、日常的に行っていることの再現なので、短時間の場面であれば、凡その内容さえ決めておけば、比較的、容易に自然な場面を作り出すことは可能である。但し、『学年会』や『教育相談担当者会』などの会議場面では、プライバシーに関わる不登校児の問題を扱うので、実情をもととした架空の事例を設定することとしたため、あらかじめ、会議の内容の凡その展開例と発言内容を用意し、出演する先生たちに筋書きに沿った話し合いをしてもらうこととなった。しかし、この場合にも、筋書きをもとに演じるとはいえ、自分自身が日常的に行っていることを再現する先生たちには、それほどの違和感はないものと考えられた。

③には、「担任教師」編での不登校児に扮する演技者が教室などに登場する場面、また、「専門機関相談員」編での、不登校に扮する演技者の母子がセンターにやってくる場面などがあるが、これらの場合には、外部の演技者が、取材場所の教室や職場に入って、現実の生徒や職員と演技を行うことになるので、彼等が、いかに本物に溶け込めるか、あるいは、本物の方が彼等を違和感なく受け入れることが出来るかどうかのポイントとなってくる。「担任教師」の場合には、演技者の役柄が、不登校気味の子供という設定なので、学級では、ほとんど他の生徒と接触する必要がなく、また、「専門機関相談員」の場合も、演技者たちが接するのは、担当のカウンセラーを除けば、受付の係員だけなので、取材先の了解さえ得られれば、演出上、それほどの難点はないものと予測された。

上記のように、①～③は、これまでも行ってきた、いわゆるドキュメンタリーな映像記録のスタイルの演出手法の守備範囲である。周到的準備さえ行っておけば、目的とする“現実に即した自然な画面”を得ることは、さほど難しいことではない。しかし、④の「ロールプレイング…」に関しては、この度の教材では、この手法を、単なるロールプレイングの紹介ではなく、あくまでもカウンセリングの実態を、リアリティをもって表現するための一つの手段として用いることになっている。となると、従来のロールプレイングの仕組みそのものから検討し直さなければならず、①～③に比べると、撮影前に、解決しておかなければならない演出上の課題も少なくはなかった。

#### (ロールプレイング)

ロールプレイングは、本編の核心部分である。ここに現実感がなく、画面が説得力に欠けるとすれば、折角、①～③をリアリティのある画面で表現したとしても、全編の真実味が失われ

てしまうことになることはいうまでもない。したがって、演出プランを策定する段階でも、このロールプレイングの場面を、どのようにして本物に近い映像にしていくかが、最大のポイントとなった。

本編のロールプレイングを、出来るだけリアリティのあるものとするために、演出上、どのような準備を経て撮影に至ったかを記すと、凡そ以下ようになる。

#### ① カウンセラー

カウンセラーについては、当然のことながら、学校や専門教育機関で実際に活動している現職教員やカウンセリングの専門家に、自身の職場で、日常的に実行している通りを再現してもらったこととした。この場合、綿密なシナリオを作成した上で、プロの俳優に演技してもらう方法もあるが、俳優がいかにか巧みに演技したとしても、作り物めいた画面となることは避けられない。また、そうした方法では、相談者の態度に自由自在に対応していく、カウンセリングの微妙なニュアンスを浮かび上がらせることも難しいだろう。学習者に、一定のマニュアルを教え込むような教材であれば、俳優によるドラマ形式での映像化も有効だが、学習者に、実践事例を観察・経験させるために、“出来るだけ本物に近いカウンセリングを再現する…”という本編の当初の“ねらい”からすると、カウンセラーには、どうしても現実の実践者に登場してもらうことが必要だと考えられた。

上のような観点から、人選を進めた結果、以下の3名の方々にカウンセラー（教育相談者）として出演して戴くこととなった。

- ・埼玉県伊奈町立伊奈中学校教諭 松本恵（「担任教師－」編）
- ・東京都東大和市立第一中学校スクールカウンセラー 坂上頼子（「スクールカウンセラー－」編）
- ・埼玉県立南教育センター教育相談部相談員 野上真紀子（「専門機関相談員－」編）

松本氏は、伊奈中学校の現職の教員である。自分自身も一年生の担任で、また、全校の教育相談係もしており、カウンセリングの専門家ではないが、豊富な教育相談の経験をもっている。坂上氏は、文部省の「スクールカウンセラー活用調査委託事業」で2年間の予定で、東大和市立第一中学校に派遣されたスクールカウンセラーである。臨床心理士の資格をもつカウンセリングの専門家で、これまでも、私立の女子高などで凡そ10年に亙る経験をもっている。野上氏もまた、教員経験を経て現職に至り、長年、教育相談の仕事に携わってきた、ベテランのカウンセラーの一人である。

三人は、現職教員・スクールカウンセラー・教育相談員…と、それぞれに立場を異にするが、各編のテーマに応じたカウンセリングを展開するには、最適な人材といってよいだろう。しかし、3人がカウンセリング（教育相談）のベテランであることは間違いのないとして、問題は、クライアントに誰を設定するかである。勿論、彼等が日常的に行っているカウンセリングのようすを、そのままに取材出来れば良いが、前述したようにプライバシーの問題があり、ロールプレイングの手法に頼らざるを得ない。とすると、より真実に近いロールプレイングを再現するには、カウンセラーは問題ないとして、その相手のクライアントとして、どのような立場の人物を設定するかが、大きな鍵となってくる。

## ② クライエント

ロールプレイングのクライエントの役柄には、同学年の中学生等の起用も考えられたが、人選の困難さや、演技力への不安もあり、結局、当初の計画通り児童劇団に所属している子役を起用することとなった。子役であれば、想定したキャラクターを、オーディションによって自由に選択出来るし、こちらの希望する日時・場所での出演も可能となる。

撮影に先立って、クライエント役の出演者のオーディションを行うこととし、まず、役柄を特定するために、各編のカウンセラー（教育相談者）に、過去の事例をもととして、クライエントの役柄を以下のように設定してもらった。

- ・藤村裕子－公立中学1年女子－（「担任教師－」編）
- ・平野満雄－公立中学三年男子－（「スクールカウンセラー－」編）
- ・秋山洋子－公立中学一年女子－（「専門機関相談員－」編）

一般的な、いわゆるロールプレイングは、心理治療や対人関係のスキル訓練等を目的として行われるもので、指導者のリードのもとに、参加者たちが、さまざまな役柄を与えられて、即興劇を展開しれていく。この場合、参加者たちは、演ずることを通して、学習することがポイントになっているので、観客を意識して、いかにもそれらしく、上手に演じて見せることはほとんど必要とされない。例えば、男が女の役柄になったり、大人が子供を演じるといった事態もあり得るのである。しかし、本編では、観客に、まず、カウンセリングの実態をありのままに把握してもらうことを目的としているので、出演者には、出来るだけモデルに近いキャラクターで、しかも、本物らしく自然な演技が出来る出演者を選ぶことが優先されることになる。

出演者を決定するに当たっては、上のようなことを留意しながら、オーディションを行うこととし、4つの児童劇団から20名（男子9名、女子11名）の子役に参加してもらった。そして、タレント性や演技の巧拙ではなく、むしろ、その風貌や、登場人物になり切って、自然な振る舞いが期待出来るかどうかといった点を選択の基準として、面接を重ね、以下の3名の出演者（藤村裕子役－阿部麻美、平野満雄役－加藤史典、秋山洋子役－栗原 愛）を決定した。

## ③ プロフィールと相談内容の設定

出演者が決まったところで、カウンセリングでは、クライエントがどんなプロフィールをもっていて、どのような相談を行うか、その凡その内容をあらかじめ定めておく必要に迫られた。クライエント役の出演者は、全くの別人に扮することになるので、事前に、その人物のプロフィールについての情報を与えておかななくては演じようがないことになる。

今回の場合、本物に近いカウンセリングを再現することがポイントなので、詳しい台詞まで書いたシナリオを用意することが得策でないことはいうまでもない。演技者が、シナリオを与えられれば、台詞を覚えようとするだろうし、それでは、作りもののドラマと変わらぬものとなって、ドキュメンタリーなタッチは全く期待出来ない。

出演のカウンセラーに依頼して、最終的に決定した、各編のクライエントのプロフィールと相談内容のアウトラインは、以下の通りである。

・藤村裕子－13歳（「担任教師－」編）

成績－中位

部活－陸上部（走り幅跳び、長距離）

係り－環境委員

家族－藤村保雄（父、公務員－45歳）

- ♪ 和子（母、保健婦－43歳）
- ♪ 良子（姉、高校1年－16歳）
- ♪ 武司（兄、中学3年－15歳）
- ♪ 博志（弟、小学5年－11歳）

相談内容－最近、友人の田中さんや中村さんを中心に、クラスの皆が冷たくなったように感じる。思い当たることというと、体育祭の練習に遅れて、田中さんや中村さんにしつこく注意されて、ムツとしたことだが、それ以後、二人を初め、皆から無視されているように思う。みんなと仲良くしたいと思うが、きっかけが掴めず、クラスに居辛い。

・平野満雄－15歳（「スクールカウンセラー」編）

成績－中位

得意科目－国語、図工

趣味－サッカー、音楽（ギター）

好きな食べ物－カレーライス

家族－平野増雄（父、工場技術者、病弱－43歳）

- ♪ 泰子（母、パートタイマー－40歳）
- ♪ 裕子（妹、中学1年－13歳）
- ♪ 良雄（弟、小学5年－11歳）

相談内容－3年になって、進路の問題で悩んでいる。自分は、都立のA高校に行って、のんびり好きなサッカーでもして、高卒で就職しても良いと思っている。しかし、両親は、就職に有利な大学進学を目指すために、私立のB高校に行けという。確かに、B高校は良い学校だが、遠隔地にあって月謝も高い。病弱な父親は、残業続きで、母親もパートで頑張っているが、これ以上、無理させたくないと考えている。自分の実力では、A高校もぎりぎりなので、A高校一本に絞りたいのだが、両親の考えとかみ合わず、口論の耐えない日々が続く、減入っている。

・秋山洋子－13歳（「専門機関相談員－」編）

成績－中位

得意科目－運動

家族－秋山 久（父、会社員－45歳）

- ♪ 和子（母、パートタイマー－43歳）
- ♪ 弘史（弟、小学4年－10歳）



相談内容—学校で、クラスの男子から顔がきついので近寄るな言われた。また、他の女子も、こちらが近づいていくと、話をやめて離れていくような気がする。そこで、先生に相談したら、「少し、気にし過ぎではないか。そんなことがあっても、乗り越えなくては…」と言われ、誰も自分の気持ちを分かってくれない気がして、学校に行きたくなくなった。家で、両親に学校に行くように言われ、パニックになり、物を投げたり、カッターで手首を傷つけたこともあった。

出演のカウンセラーから出された、モデルの設定をもとにして、以上のようなプロフィールと相談例を作成した。そして、これに“役作りのポイント”を付して、撮影の数日前に、クライアントを演じる子役たちに渡し、事前に役柄を研究しておいてもらうこととした。“役作りのポイント”の内容の一例を示すと、以下の通りである。

(「学級担任—」編—藤村裕子役用)

- ・まず、自分が、上のような悩みを抱えている中学1年生なのだと設定してみてください。自分と似ているところ、似ていないところいろいろあると思いますが、出来るだけ、自分の経験に引きつけて、ストーリーを頭に入れて下さい。
- ・上の設定が、中学2年のあなたに不自然なように思えたら、多少は、設定を訂正しても構いません。(でも、主人公が悩んでいるのは、あくまでも、クラスの皆から冷たくされているのだということを忘れないように…)
- ・人物の設定が出来たら、次に、藤村さんの生活のディテールを出来るだけ思い浮かべて、人物像を固めてみてください。家族の人物像は？ 彼女の日々の暮らしぶり？ 学校での生活は？ 友達との交流のようすは？ 特に、田中さん中村さんとのトラブルがあった体育祭のクラス練習の前後のことについては、詳しく、その場面のイメージを固めておいて下さい。
- ・但し、これは、あくまでも、ロールプレイングなので、セリフを考える必要はありません。あなたが、事前に、どこまで藤村さんの人物像や気持ちについて研究していたかが、この仕事の成功の鍵となります。
- ・日頃のドラマなどの仕事と違って、面倒なことをお願いして申し訳ありませんが、よろしくをお願いします。

普通、オーディションなどで配役された演技者は、台本を渡され、それを読んで自分の役柄を研究し、台詞などを覚えていく。しかし、今回のビデオで要求されるのは、台詞の暗記ではなく、出来るだけ役柄を深く理解して、カウンセラーと臨機応変な対応が出来るように備えることである。したがって、役柄についての情報を、どこまで与えたらよいかポイントとなる。セリフを与えないまでも、あまりに過剰な情報を与えたら、演技者は、それに縛られて、身動きも出来ないということにもなりかねない。また、情報が貧困であれば、演技者は、役柄についてのイメージを膨らませることが難しくなる。どこまで、情報を与えたらよいかについては、前例がないため判断がつかねたが、とりあえず、上記のような“プロ

フィール”、“相談内容”、“役作りのポイント”を、A4で2枚ほどのペーパーにまとめて、あらかじめ出演者に渡すこととした。

この後、演技者たちが、撮影現場で、どこまで役柄になりきれられるかは、当人が、事前の準備で人物像をどこまで深めておけるに委ねられることになる。

#### 4. 撮影～仕上げ

ロールプレイング場面も含めた、撮影は、以下のような日程で進められた。

- ・「スクールカウンセラー」編（於 東大和市立第一中学校）  
平成10年2月2日（月）登校風景、教員室、教室授業、教育相談担当者会議…等。
  - ♪3日（火）学校周辺、カウンセリング室（面接風景）…等。
  - ♪7日（土）カウンセリング室、放課後の校庭…等。
  
- ・「担任教師」編（於 伊奈町立伊奈中学校）  
平成10年2月9日（月）教員室、教室授業、教員室、学年会…等。
  - ♪12日（木）校内スケッチ（校庭、教室、廊下）…等。
  - ♪16日（月）教育相談担当者会議、教育相談研修会…等。
  - ♪17日（火）教育相談室（面接風景）、校内スケッチ…等。
  
- ・「専門機関相談員」編（於 埼玉県立南教育センター教育相談部）  
平成10年3月4日（水）電話相談室、指導相談部、受理会議…等。
  - ♪5日（木）指導相談部…等。
  - ♪6日（金）受付、待合室、相談室（面接風景）…等。

取材先の日常活動への影響を配慮して、出来るだけ限られた日数の中で、全ての作業を終了させるため、ややタイトなスケジュールが組まれることとなった。しかし、事前に十分な準備を行い、また、取材先の全面的な協力が得られたこともあって、最終的には、初期の予定通りに、目的とする画面を得ることが出来た。

校内の職員や生徒たちの活動等をとらえる場面については、ねらい通り、ドキュメンタリータッチの画面を得られたし、また、懸念された教師や職員による、いわゆる“やらせ”の場面についても、日常活動の再現ということもあって、きわめて自然な動きを映像化することが出来た。カウンセリングについては、子役とカウンセラーの面談という新しい試みがどのような結果を生むか、予測がつかない個所だけに、当初から不安な点も少なくはなかった。しかし、カウンセリングそのものの内容については後の評価を待つこととして、少なくとも、その演技面については、きわめて自然な展開をとらえることが出来たものと考えている。

このカウンセリング場面の撮影では、ビデオと平行してDVDビデオでも使用することを前提として、3台のカメラが、“カウンセラー”、“クラエアント”、“その両者”をそれぞれにねらい、面談の開始から終了までを、まるごと撮影するという方法がとられた。撮影の開始直前

に、それぞれの人物像について確認した後は、途中、演技者がつまずいても、中断して演技指導をしたりはせず、ともかく、最後までノンストップでカメラを回すという方法に、子役たちが耐えられるかどうか心配されたが、ベテランのカウンセラーのリードのせいもあって、それぞれ、“16分14秒”（「担任教師－」編）、“24分32秒”（「スクールカウンセラー－」編）、“31分07秒”（「専門機関相談員－」編）という長丁場のカウンセリング場面を、一応、破綻なく乗り切った。

各編のカウンセリングは、各々の出演者の個性を反映して、三者三様の展開を見せた。

まず、「担任教師－」編では、面談を担当する松本教諭が、教育相談は行っているが、特に、カウンセリングを意識して面談を行っているわけではないことから、あらかじめ、共同研究者の一人が、凡その面談の流れを作り、それに沿って、カウンセリングを展開することになった。クライアントを迎え入れてから終了までのカウンセラーの動きを、一度、頭に入れてから行われた面談は、きわめて自然に進行したように見えたが、松本教諭が日常行っている実践事例の紹介とするには、やや、その形態が異なっており、こうした設定が適切だったかどうかという点は、今後の課題となる。クライアントの藤村裕子役（阿部麻美）については、仲間外れにされた女子中学生という役柄を、比較的、的確に掴み、与えられた状況にも、自然に溶け込んでいるように見えた。

「スクールカウンセラー－」編では、担当の坂本氏が現実のスクールカウンセラーであるところから、あらかじめ、何の用意もなく、ぶっつけで撮影に入ったが、全く問題のない自然な面談が展開された。クライアントの平野満雄役（加藤史典）も、あらかじめ与えておいた人物像をよく研究しており、実に、自由闊達な応答が展開された。しかし、リアリティという点からすると、問題を抱えたクライアントとしては、あまりにも会話が弾み過ぎて、視聴者に、かえって作りものめいた感じを与えはしないかとも懸念された。

「専門機関相談員－」編の野中氏も、日常的に相談活動を行っているベテランの相談員だけに、きわめて自然な、リアリティのある面談場面が収録出来た。クライアントの秋山洋子役（栗原 愛）も、深刻な状態にある不登校児という役柄になりきり、状況の中に、浸り切っているように見えた。彼女の場合、他の二人と異なって、面談中、きわめて口数が少なく、沈黙の間が多いことが特徴だが、そのことが却って、一人で悩み苦しむ役柄の心の葛藤を顕わしているようにも思えた。野中氏によれば、このように、沈黙の間の多い面談も、実際に少なくないというが、それを、子役が演じているという観点からすると、話すべき言葉が見つからずに苦しんでいたともとれることになり、その真偽を見極めることは難しい。クライアントに演技者を配役するという、こうした設定のロールプレイングで、なにをもってリアリティの基準とすべきかについては、まだまだ、多くの課題が残されているようにも考えられる。

以上のように収録を行った後、凡そ下記のような日程で、最後の仕上げにとりかかった。

「担任教師－」編

本編集－平成10年5月21日（木）～22日（金） 於 メディア教育開発センター  
制作棟編集室

MA－平成10年5月29日（金） 於 ヨコシネD.I.A、MA室

・「スクールカウンセラー」編

本編集－平成10年8月6日（木）～7日（金） 於 メディア教育開発センター  
制作棟編集室

MA－平成10年8月25日（火） 於 ヨコシネD.I.A、MA室

・「専門機関相談員」編

本編集－平成10年10月29日（木）

11月10日（火） 於 メディア教育開発センター 制作棟編集室

MA－平成10年11月21日（土） ヨコシネD.I.A、MA室

編集に当たって、特に留意したのは、3台のカメラで長時間の収録を行ったカウンセリングの場面である。面談の場面は、三つのアングルから丸ごととらえられており、どこをどのように切り取っても、スムーズな編集が可能である。しかし、材料が豊富で、多様な編集が可能にだけに、どこに画面の焦点を絞っていくかが大きな課題となる。今回の編集では、本シリーズの主な目的が、カウンセリングの実態の観察・体験という点に置かれているところから、三本を通して、特に、カウンセラーの動きをフォローすることに力を注いで編集していくこととした。「専門機関相談員」編では、カウンセリングの模様をノーカットで提供するという原則を承知しながら、編集の最初の段階では、クライアントの沈黙の間を恣意的にカットして、共同研究者の指摘を受けた。カウンセリングにおける沈黙の間も、実践事例としては、欠かすことのできない貴重なデータの一つであり、長さの問題があったとしても、軽々にカットすべきでないことはいうまでもない。反省点として記しておきたい。

MA（録音）でも、このビデオが、実践事例を提供する教材であることを考慮して、ナレーションなども、出来るだけ、客観性を保った、事実が正確に浮かび上がるものにするようにと努めた。当然のことながら、音楽なども、プロローグとエンディングだけに止めるようにし、この種の教材には不要な、余計な感情移入が行われないようにと配慮した。

## 5. まとめ

カウンセリング教材のプロトタイプの開発過程を、演出面に焦点を絞って辿ってみた。

既に述べてきたように、演出上の第一のポイントは、非公開を原則とするカウンセリングの面談場面を、出来るだけ現実に近い、リアリティのある画面に仕上げるということであった。

この点については、完成したプロトタイプの検討会でも、ほぼ、当初の“ねらい”が実現出来たのではないかと意見を得た。また、その後、完成教材の一部を使用して、学生や現職教員などを対象として行った、いくつかの評価調査でも、その中の“リアリティがあったか？”という設問については、70%前後の人々から肯定的な回答が寄せられた。

こうした結果からすると、ある程度までは、リアリティのある画面を作り出すことが出来たのではないとも考えられる。しかし、総体的に肯定的な意見が得られたとしても、まだ、約30%もの人々が否定的な回答しているわけで、この人々が、“なぜリアリティを感じなかったか？”については、今後のためにも、その要因を検討しておくことが必要だろう。少なくとも

も、否定的な回答をした人々にとっては、画面にリアリティがないと感じたその時点から、この教材は無意味なものになってしまうからである。

今回のロールプレイングの最も大きな特徴は、クライアントに劇団の子役を起用した点にある。それは、何度も記してきたように、プライバシーの問題から、本物を起用出来なかったという事情によるものだが、今回のロールプレイングが、リアリティのあるものに仕上がったかどうかについては、この子役の起用という試みも、大きく影響してくるものと考え。では、子役たちの演技は、今回のロールプレイングのリアリティに、どのように関わるものであったろうか？

普通、劇団に所属する子役が、ドラマなどに出演する場合には、状況設定や台詞などが詳しく書き込まれた台本を渡され、それに沿って、役柄を研究し本番に臨むことになる。現場で、即興的な演技が要求されることがあったとしても、ごく短いシーンのことであり、この度のように、大まかな状況設定だけを与えられるだけで、自分で台詞の全てを考えながら数十分のシーンを演ずるなどということは、まず、ないことと行って良いだろう。劇団での演技訓練は、台詞まわしや身体行動の訓練がほとんどであり、中には、エチュードという形で、いろいろな状況での役柄を、即興的に演じるロールプレイングに近い実践的な訓練方法もあるが、これも、台本の役柄をいかに表現するかの訓練のために行われるもので、決して、今回のようなロールプレイングへの出演に備えるようなものではない。しかし、日頃、ロールプレイングなどには無縁な子役たちであったが、画面のリアリティについて、70%に近い肯定的な評価が得られたことから分かるように、その演技は、ほぼ初期の“ねらい”に沿った成果を示したと見てよいだろう。しかし、子役たちの演技が、画面に表わされたリアリティに、全面的に関わっていたかどうかについては、さらに、詳しい検討の結果を待たなければならないだろう。なぜなら、画面のリアリティを構成する要素には、単なる子役の演技の自然さばかりでなく、そのカウンセリングの状況設定や話の内容の真实性など、実に、さまざまな要素が含まれているからである。例え、子役がリアリティのある自然な演技を展開していたとしても、その役柄の設定や話の内容が疑わしいと受け取られたとしたら、その時点から、その演技も嘘っぽいと判断されてしまうといったことも起こり得るのである。従って、カウンセリング場面のリアリティについて取り上げるのだとすれば、単に、演技面ばかりでなく、リアリティの構成要素にかかわる、演出上の仕掛けの全てについて検討しなければならないということになってくるのである。これから、どのような演出手法を開発していくにしろ、カウンセリング場面をリアリティをもった映像に定着するという作業は、人の心の内面の動きにかかわっているだけに、そこには、一筋縄ではいかない、さまざまな表現上の課題が、数多く立ちはだかっている。これまでに、この種の教材が、あまり数多く試みられなかったのも、この辺りに理由があるのだろう。しかし、教育界で“心の教育”への期待が、ますます高まっている現状からして、よりリアリティに富んだ利用効果の高いカウンセリング教材の開発を目指して、演出上でも、さらに多様な試みが積み重ねられていくべきなのではないだろうか？

当プロジェクトでは、プロトタイプの第一作の開発後、プロジェクトメンバーによる研究会を開催して、形成的評価を重ねた。そこでは、多彩な意見の交換が行われ、細部にわたって改訂部分が指摘されたが、最も大きなポイントとなったのは、カウンセリング場面が一つの実践

事例ではなく、模範例として見えてしまうという問題だった。この度の教材は、企画の当初から、あくまでも、検討用の一つの実践事例を提示するということにあつたが、先に上げた評価調査で、カウンセリング場面が、“模範例として描かれていると感じましたか？…”という設問には、85%から90%に近い肯定的な回答が寄せられている。また、試験的に何人かの教育関係者に見せた結果でも、模範例ととらえる人が少なくはなかった。この教材は、模範的なマニュアルではなく、視聴者の検討用の資料として利用されることを目的として制作されたものだけに、模範例として受け取られるとしたら、大きな誤算といわなければならない。研究会での検討の結果、そうした誤解の生まれないための対策として、ビデオの冒頭で、この教材でのカウンセリングが、子役を使ったロールプレイであり、一つのトライアルなのだということを、字幕とナレーションによってきちんと説明することとした。しかし、一般に、学習者がこの種の教材を見る時には、模範例という先入観をもって見てしまうのは通例のことであり、こうした誤解を受けないために、このような場合、どのような処理をしたらよいかについては、さらに、研究していかなくてはならない問題であろう。

以後、本教材は、改訂点を修正した後、平成10年度をもって全ての作業を終了した。

そして、このプロトタイプの研究開発の成果を取り入れて、平成11年度に事業部版のカウンセリングにかかわる教師教育用ビデオ・基礎編3巻を、さらに、平成12年度に同・応用編3巻を完成させた。尚、このシリーズ6巻の詳細は、以下の通りである。

#### 教師教育教材ビデオ

第一巻「学校教育とカウンセリングー担任教師による実践事例」

第二巻「学校教育とカウンセリングースクールカウンセラーによる実践事例」

第三巻「学校教育とカウンセリングー専門機関相談員による実践事例」

第四巻「学校教育とカウンセリングー学習指導での実践事例」

第五巻「学校教育とカウンセリングー学級集団づくりでの実践事例」

第六巻「学校教育とカウンセリングー進路指導での実践事例」

#### 【参考文献】

1. 宮本友弘・山田恒夫・福井康雄、(1998)「心の教育」を支援する教師教育教材の開発と評価ービデオ及びDVDによるカウンセリング教材ー。日本視聴覚・放送教育学会第五回大会発表論文集、94-95
2. 宮本友弘、(1998.6.4)ビデオ教材「学校教育とカウンセリングー教師による実践事例ー」に関する評価調査結果NO1 (山口県教育研修センター主催、上級教育相談研修会、講師一名古屋大学田畑治教授ーにおいて実施)